

〔研究ノート〕

矢代幸雄と滕固
—二人のアジア美術史家の眼—

大和文華館初代館長であった矢代幸雄(1890—1975)は、イギリス・イタリアに留学し英文大著『サントロ・ボッティチェリ』を出版、帰国後は西洋美術からみた東洋美術の普遍的価値を追求し、その理念は現在まで当館に受け継がれています。ところが中国にも、矢代と同じヨーロッパで美術史学を学び、帰国後はその普遍的な眼で東洋美術を見直そうと奮闘した美術史家がいました。

滕固(1901～1942)は中国江蘇出身、矢代幸雄より約十歳年下の光緒27年(明治34年)の生まれです。滕固は18歳で日本に留学し、美学や文芸学を学びます。当時の日本は中国人にとって西洋文明摂取の窓口で、留学中には佐藤春夫、芥川龍之介とも交流したようです。

滕固にとって転機になったのは28歳から三年間のドイツ留学です。滕固はベルリン大学のMax Dessoir教授のもと美学と美術史を学び、中国人として最も早い時期に哲学博士の学位を授与され、帰国します(図2)。

帰国後、滕固は一つの課題に直面します。それは中国芸術の世界性の問題でした。当時、長い歴史を誇る中国の芸術も、否定なしに西洋芸術との対話を迫られ、時代は、世界的視

野から中国芸術を語れる人間を求めています。滕固は西洋的な方法で中国の伝統芸術を分析し、普遍的な芸術史の中に位置づけることで、その答えを得ようとしたのです。

滕固が取った方法は様式論でした。当時中国語で「風格」と訳されたドイツ語のStil(様式)は、現在でも使われる美術史の根本的な概念です。滕固は伝統的な董其昌の南北二宗論などを否定し、具体的な「風格発展(Stilentwicklung)」から絵画史をとらえようとした。その代表例が『唐宋絵画史』(1933年、図3)の出版です。今から見ると必ずしも成功しているとは言えませんが、そこからは、中国美術を民族美術から脱皮させ、西洋人にも理解できる普遍的な記述を行うという強い意欲が感じられます。

その後滕固の関心は、より直接的な様式分析が可能な考古学分野に拡がり、また中央古物保管委員として南京・西安・雲崗などの遺跡を調査していきます(図1)。このような西洋留学による近代的な方法論の導入と帰国後の東洋美術再評価、文化財行政への参与などは、矢代幸雄と同じ、20世紀初頭のアジア美術史家の典型と言えるでしょう。

1935年にはロンドンで中国芸術国



図5 「中国芸術史学会」の設立。
後列左二人目が滕固

際展覧会が行われます。滕固は上海で、矢代はロンドンでそれぞれ参観し、東洋美術の国際性について大きな示唆を受けました(図4)。1937年5月18日、滕固は当時首都であった南京で「中国芸術史学会」を設立させます。この学会は他に、ドイツ、アメリカ留学から帰国した、美学者宗白華(1897-1986)・考古学者梁思永(1904-1954)らの気鋭の学者が参加し、この年こそはまさに、中国における「美術史学」誕生の年だったと言えるでしょう(図5)。ここでは世界に向けて「中国芸術考古」の権威ある雑誌を発刊し、世界の主要美術館や学者と期刊や著作を交換することなどが謳われていました。注目すべきは、学会の内容に伝統的な書画に加えて青銅器などの器物も含まれていたことで、彫刻(仏像)と絵画が研究の中心となっていく日本の美術史学とも大きく違っていました。ここからは、これまでに中国の留学生たちが学び取ってきた英米的美術考古学とドイツの美学美術史を折衷させつつ、旧



図6 杭州芸術専科学学校校長時代の滕固と生徒たち

清朝の皇帝コレクションや殷墟発掘の最新の成果を世界に発信し、かつ中国固有の芸術体系を反映させた、中国人自身による独自の芸術史構築の萌芽が見て取れるでしょう。

このように様々な可能性をひめた会の発足でしたが、その約二ヶ月後、日本軍が南京に侵攻すると、滕固たち新世代学者たちも重慶、四川に疎開を迫られ、その最中の1942年、滕固は夭折し、学会も霧散してしまいます。日本の敗戦後、中国は国共内戦と文化大革命の長い混乱に突入、その間の中国美術史研究は欧米や日本に中心が移っていきました。しかし80年代からは、アメリカ留学から帰国した台湾人たちが研究を始め、大陸でも新世代の学者が育ち、現在では、中国美術史も中国人自身の手によって保存と研究がなされる時代が来ています。しかし戦後台湾故宮の基礎を築いた蔣復璁(1900-1990)や李霖燦(1913-1999)は、みな滕固ゆかりの人であり、激動の中国近代において、美術史研究の荒野に滕固が播いた種は、現在において、確実に実を結んでいると言えるでしょう(図6)。

20世紀初頭は、伝統的な東洋芸術の理解を巡って様々な議論が戦わされた時代でした。1930年、イタリアを訪れていた滕固は、ここで5年前までボッティチェリ研究に没頭していた同じアジア人がいたことを知っていたかもしれません。矢代幸雄と滕固は、西洋からみた東洋美術の普遍的価値を同じく追求し、時代の問題に答えようとした、同じ時代を生きたアジア人だったと言えるでしょう。

(図版1.2.5.6は『滕固芸術文集』上海人民美術出版社、2003年より転載)
(学芸部部員 塚本磨充)

図1



図2



図3

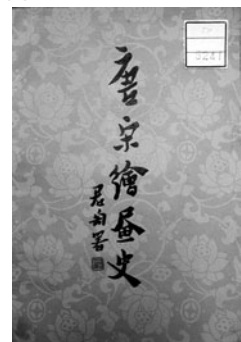


図4



図1 漢代石彫調査中の滕固 図2 博士論文 Chinesische Malkunsttheorie in der Tang und Sungzeit、ドイツ・グリッター社、東アジア叢書(1935年刊)
図3 滕固『唐宋絵画史』(大和文華館蔵) 図4 『倫敦中国芸術国際展覧会出品図説』(大和文華館蔵)